

## 東日本大震災と東京電力福島第一原発事故に思う

東日本大震災や東電の原発事故から1ヵ月を過ぎたあたりから、この間の関係者の対応についての検証や復興に向けての考え方が、マスコミを賑わせ始めた。共通点は、「被災者救援や原発事故対策で奮闘している自衛隊、警察、消防、原発関係者に対する賛辞」と「東電経営者、政府の対応に対する批判」であり、今後の施策については「復旧ではなく復興・再生」「地域の意思を尊重すべき」などである。逆に、意見が少しわかれているのは、原子力を利用した今後のエネルギー政策についてのように思われる。しかし、エネルギー政策についても一昔前の議論からすれば、随分現実的な議論となっているようだ。それは、これほどの大災害を前に、自然に対して誰しもが謙虚な気持ちになっているからであろう。

復興・再生にあたり最も重視すべきことは、再びこのような災害が起こった時でも、被害を最小化する努力を惜しんではいけないということであろう。このような観点から、これまでの災害対策をみみると、いくつかの特徴を探ることができる。仙台平野では、奥州街道やその宿場町はみごとに今回の津波被害を受けない場所に作られていた。同様に大船渡・吉浜湾、宮古・姉吉地区では、高台へ住宅を移していたことによって難を逃れ、仙台・霞目の「浪分神社」も津波の浸水域との境という伝承が伝わっている。明治三陸大津波や昭和三陸大津波の経験から先人達が導き出した対策が見事に実を結んでいる。一方で、原子力発電は五重の壁によって放射能の拡散を防ぐという現代技術による対策が、あっけなく無力化した。これらは、災害対策に対する人々の考え方の違いを明らかにしているのではないか。今回被害が少なかった地域の先人たちは、自然は常に牙をむくこととして受け入れ、その猛威に対して逆らわない方法で避けている。一方、原子力発電は、人が作り出したモンスターである原子炉を猛獣使いよろしく手はずけようとして、反乱にあったとも言えよう。自然に対する敬意と人間技術に対する過

信との違いとでも言えようか。私たちの自然や技術に対する見方、考え方を再考することによって、再び起こり得る災害に対して、強い地域づくりを行わなければならない。

同様に、計画停電は今までの日本の夜が異常に明るかったことに、多くの人を気付かせたのではなからうか。また、店頭から水がなくなったりしたことによって、コンビニを冷蔵庫代わりに使っていた生活の危うさに気付いた人も多いだろう。これから夏へ向けて、節電が求められる。そのために多くの努力がなされている。輪番制での休業や自家発電の強化、サマータイムの実施、5月や6月に働いて夏休みを長くするなど大手企業を中心にした大掛かりな対策や、冷房温度の引き上げやLED電球への買い替えなどといった家庭での取り組みも考えられている。

このようなことが実施されれば、夜の明るさと同じように、新たな発見があるのではなからうか。例えば、都市部でも少しだけれど真夏の温度が下がったとか、平日休業でゆっくり温泉に行けたとか、夏休みが長かったので、子供とゆっくり遊べたとか。こんな発見がたくさんあれば、今までやろうとして出来なかったワークライフバランスなんか意外にできるかもしれないなーと期待しつつ、ピンチをチャンスに変える前向きな復興・再生へ向けての取り組みが求められる。同時に今後、日本のエネルギー政策を考えるにあたっては、これまでのようにジャブジャブと使うために、どのようにして電力の供給力を増やすかという供給サイドの視点ではなく、適切な電力はどのくらいであり、その電力をどのような方法で造り出すのかという需要サイドからの発想が重要となろう。また、地震国という日本の特性を考慮に入れれば、需要サイドやソフトエネルギー関連の人たちでの将来にわたるエネルギー政策議論こそ求められているのではなからうか。

(連合総研主任研究員 中野治理)